Chapter 7**：根を焼き尽くせ**

本当は、ただのんびりした散歩のはずだった。

ブースターとシャワーズは、「ただの友達」だと主張して、両親を散歩に誘った（誰も信じていなかった）。

エーフィとブラッキーはいつも通り穏やかで、息子をからかいながら「青春蒸気愛」とか冗談を飛ばしていた。

だが、リーフィアとグレイシアはというと、まるで砂漠の吹雪のように冷たく、ぎこちなかった。

そんな中、一行は奇妙な門の前に差し掛かった。そこにはこう書かれていた：

**「私有地につき立入禁止。特にほのお・みずタイプは入るな」**

……好奇心が、常識を上回った。

その先はトリトドン――ではなく、**オーロット**の庭園だった。ねじれた根、腐った木々、囁く霊の声……不気味な森の中に、シャワーズが苔むした木に寄りかかった、その時だった。

その木が動いた。

怒りと憎悪に満ちたオーロットが地面から飛び出し、ツルを荒れ狂わせた。

「この神聖な森に火を持ち込むとは何事だァッ！　そして貴様、水の魔女！　貴様らが我が沼を干上がらせたァァ！　干からびるまで搾り取ってやるッ！！」

シャワーズの体にツタが絡まり、彼女の水分を奪い始めた。

ブースターが振り返ると、両親は少し離れた場所で――**ヤミラミ**に絡まれていた。ヤミラミは空き缶を振りながら騒いでいた。

「なあ兄ちゃん、進化の石くれよ～。キラキラのやつ～！」

ブラッキーが一瞬固まった。「……いや、今それ！？」

その隙にリーフィアとグレイシアも娘を助けに入ったが、オーロットのねじれた根が彼らを拘束し、力を吸い取っていった。

シャワーズが苦しげに息を漏らした。

「ブース……ター……」

その瞬間、ブースターの瞳に炎が宿った。

「……はなせ！！」

怒声とともにブースターが突進。全身から炎を噴き上げ、オーロットの顔面めがけて跳躍し、**全力のかえんほうしゃ**を木の頭に叩き込んだ。

オーロットは絶叫し、のたうち回り、焼け焦げながら地面に倒れ込んだ。

……沈黙。

皆の視線が、ブースターに向けられる。

シャワーズはまだ湯気を上げながらも、よろよろと歩み寄り、彼に抱きついた。

「ありがと。」

苔に覆われ、謙虚になったリーフィアとグレイシアも、小さくうなずいた。

リーフィアが咳をして言った。

「……おまえ、火のくせに……悪くないな。」

グレイシアも小さく笑った。

「……熱も、時には心地いいわね。」

そこへ、オーロットがうめき声を上げながら、ゆっくりと起き上がった。

「……我を忘れていた……来客なんて何十年ぶりかでな……すまなかった……特に水の娘よ……」

その後、一行は静かに森を後にし、太陽の差す道へと戻った。少し震えながらも、皆無事だった。

歩きながら、シャワーズがブースターにもたれかかった。

「……また助けられちゃった。」

ブースターが笑った。

「いや……君が先に、ファイアローぶっ飛ばしてくれただろ。」

シャワーズはくすりと笑った。

「たしかに。」